

# 歴史都市京都の減災まちづくり

兵庫県立大学大学院 減災復興政策研究科 研究科長・教授 室崎益輝

## ■「減災まちづくり」について

### ●教訓としての減災まちづくり

「減災まちづくり」という言葉は、「減災」という言葉と、平仮名の「まち」と「つくり」という3つの言葉から構成されているのですが、阪神・淡路大震災の前までは、そういう言葉はなくて「防災都市計画事業」という言葉を使っていました。この変化にはとても重要な意味がありますので、今日のお話の初めにまずはご説明したいと思います。

さて、「減災」と「防災」はどこが違うのでしょうか。京都市においても、少なくとも阪神・淡路大震災までは「防災」という言葉を使っていましたが、大震災以後は「防災」から「減災」に言葉が変わっています。ところが計画の中身はあまり変わっていない。単に「防災」を「減災」に置き換えているだけなのですが、実はそれではいけなくて、「減災」は今までは全く違った概念・発想に基づいています。

一番大きな哲学的な意味としては、自然はとても大きな存在であるということです。一時は予知ができると言っていたものですが、最近では皆、「予知はできません」と言っています。それは自然がわからないから。ですから今までは東海地震が来ると、警戒宣言を出して、新幹線を止めるという考え方だったのですが、それはやめになりました。いつ、どんな地震が来るかわからないから、何が起きてもいいように備えなさいというのが国の方針になっています。自然はわからない、とても大きな存在であるのに対して、人間はとてもちっぽけな存在だということです。これが阪神・淡路大震災を経験して、痛感したことなのです。

「防災」というのは、人間の力で津波や地震の揺れを抑え込める、10mの津波が来るなら、20mの堤防で抑さえてやるぞという、技術を過信している考え方を元にしています。「災害を防ぐ」というのは、基本的には被害を0にするという考え方です。ところが富士山が突然噴火したり、巨大な南海トラフ地震が起きたりすると、いくらなんでも防げない。ただ微妙に混乱している部分もあって、東北などでは

まだ防ぎたいと思っているので、一生懸命、巨大な堤防をつくらうとしています。ただ人間の力が及ばないところも多々あって、むしろ自然を抑さえつけようとするのではなく、自然とうまく付き合いながら、ひょっとしたら自然に人間は負けるかもしれないと謙虚になりなさいということです。まさに「大きな自然」に対して「小さな人間」として、人間の驕り<sup>おご</sup>を捨てて、自然に対してもっと素直に向き合いなさいというのが、「減災」の基本的な考え方なのです。

「小さな人間」ですからできることをコツコツと積み上げるしかありません。「減災」の基本は、できることをしっかり皆で力を合わせて、コツコツと積み上げて、少しずつ被害を避けていくという考え方です。

### ●リスクは強度×頻度で考える

では具体的にはどのようなことをすればいいのでしょうか。キーワードは「合わせ技」です。コツコツとやる、色んな対策をうまく合わせながら、少しでも被害を小さくしようということです。減らすという事は、最悪の場合、人が死ぬ場合もあることを覚悟するということです。あくまでも0にすることではなく、ひょっとしたらそういうこともあるかもしれないという概念です。例えば飛行機は、過去30年の統計によると、50万人に1人死ぬ確率になっています。でも乗る人はいるわけで、なぜ乗るのかという話です。この数字は、飛行機で落ちて死ぬのと、東北地方で同じような津波が来て、堤防を乗り越えて死ぬのと、確率的にはほとんど一緒です。

でも東北の人たちは今、巨大な堤防をつくって、山の上に逃げようとしています。もちろん決めるのは東北の人たちで、あれこれ私が言うことではありませんが、それは飛行機が怖いので飛行機には乗らないという選択肢なのです。選択の幅があるので、まさしく乗る自由もあるし、乗らない自由もある。そういう自然の危険性にどう向き合うのかということだと思います。デパートと住宅ではどちらが危険か、飛行機と車ではどちらが危険か、エイズと糖尿病ではどちらが危険かと聞くと、大抵人は強度を考

えます。でも実際は車は年間 4,000~5,000 人死ぬので、我々の身近にあるもので車ほど危険なものはないのですが、皆、車には安心して乗るわけです。同じように住宅よりもデパート、糖尿病よりエイズの方が危険だと答えます。でも本当のリスクは頻度×人数で考えるものなので、強度と頻度を掛け合わせて考えないといけない。東北では 1000 年に 1 回の地震のために、巨大な堤防をつくって、海が見えなくなり、美味しい魚が食べられなくなり、きれいな朝日が見えなくなるということを、今やろうとしているのですが、むしろもっと海のそばに住んで、漁に出て、美味しい魚を食べながら、危険があればすぐに高台に逃げる訓練をするという方法もあるはずです。

「諦める」というのは、とても重要なことで、諦めないでとことんしがみつくと、もっと大切なものを失ってしまうかもしれない。命が大切なのは大前提ですが、命と共に大切なものが色々あるということです。今後はそういう考え方を取っていこうというのが、「減災」という概念の根本です。

#### ●まちとは

「都市」ではなく「まち」で、平仮名だからやさしく、身近になっています。「まち」と読む漢字には街路の「街」と町衆の「町」があるわけですが、「街」はハードな家が建ち並んでいる様を言い、もう一方の「町」はコミュニティのことを言っています。でも我々が目指しているのは、建物をつくるだけのものでもないし、コミュニティだけでもありません。ハードもソフトも全体を含めたものを「まち」として考えようとした時に、当てはまる漢字がないので、平仮名になったわけです。ハードでもない、ソフトでもない全体を乗り越えて、もっと有機的融合的に考えていこうということです。これを行政的に言うと、ハードな土木屋さんがやるようなまちづくりもあるけれども、社会福祉をやる人のまちづくりもあって、一体となってやりましょうということなのです。自分のセクションだけでまちづくりをやろうとしてもうまくいかないことを、まちづくりの「まち」は教えてくれているわけです。防災や減災のことをアメリカで「ナショナル・レジリエンス」と言っていて、本来は「ナショナル」は「国民の・市民の」という意味ですし、「レジリエンス」は「しなやかな

弾力的な仕組み」を言うのですが、「国土の強靱化」と訳してしまったものですから、あたかも堤防や巨大な幹線道路をつくるイメージになってしまった。ですから国は「国土の強靱化」と言うのですが、国土の強靱化と共に、コミュニティ自身の強靱化も必要なのです。ですから平仮名の「まち」の持つ柔らかさには、コミュニティのしなやかさが必要だということが含まれているわけです。

#### ●つくりとは

これは「手づくり」のつくり、「つくり酒屋」のつくりです。「手づくり」のつくりというのは、まちづくりは、トップダウンだけではなくて、ボトムアップ、つまり一人ひとりの思いを形づくることなので、皆の思いを集めていくことが重要であるという意味が込められています。

一方で「つくり酒屋」の「つくり」は、その地域に根ざした、その地域にしかない、地域の特徴を活かすということです。お酒でも伏見と灘とでは違うように、伏見のまちづくりは伏見のまちでないといけないことをやるという、まさに地域性みたいなものがあるのです。そういう意味では、防災こそ自治なのです。自治というのは、自分たちで自分たちの命を守る、自分たちの運命は、自分たちで決めるということです。誰かが決めて「ここに住め」というものではありません。まさに地方分権や防災自治という概念を「つくり」という平仮名で表しているのです。今までのトップダウン型の決まった形を押し付けられるような都市計画ではなく、自分たちの思いでどんどんつくっていく。それは昔から京都にはあって、祇園祭など、全部まちづくりです。まさに釈迦に説法ですが、あえてそれまでの都市計画事業と減災まちづくりはどこが違うかということを頭に入れながら、これからのまちづくりを進めないといけないと思っています。

### ■減災まちづくりと足し算

#### ●時間の足し算

今までの日本の防災対策は、起きてから頑張ろうというものでした。日本人は集中性もあるし、組織性もあるし、手先も器用なので、起きてからでも頑張れます。代表例がバケツリレーです。京都市がそうだというのはなく、国全体がそうです。次の首

都直下の地震が起きれば、80万棟が焼け、1万人が死ぬと予測されています。この数字、国はかなり低く見積もっていて、私の被害想定は6万人死ぬことになっています。1万人としても、大変な事態で、それに対して自主防災組織をつくって、バケツリレーの訓練をして消すと言っていますが、消せるはずがありません。最初のうちは消えますが、大きな炎になると、炎の高さが30m、幅が300mの巨大な炎が押し寄せてきます。100m離れていてもやけどをします。そういうものに対して戦争中のB29の来襲よろしくバケツリレーで戦うなど、本当に滑稽な話です。

そんなものに綿々としがみついているのは、起きてから頑張るという発想です。我々の研究の世界でも、救助ロボットの研究には予算が簡単におりるのに、火災予防にあたる電気火災を減らすための感震ブレーカーには予算をつけてくれない。でも本当は起きる前のことをしっかり頑張らないといけないのです。事後という意味では、京都ならば、地震の起きた次の年から、今と同じ観光客が来てくれないと、地域経済が衰退して、生きていけなくなります。まさに経済復興のプログラムも必須だということです。

ところが京都市の地域防災計画を見ると、経済復興についてはほとんど書かれず、仮設住宅をつくって、義援金を配ることしか書いていません。それでまちが良くなるかという、やはり難しいわけです。だからこそ**事前と事後の関連性を意識すること**が重要です。特に家具の転倒防止や耐震補強など、事前にやれることはしっかりとやるべきなのです。

この事前の取組について予防医学に例えると、耐震補強などは予防接種といったところですが、その前に公衆衛生というものがあります。公衆衛生は日ごろから睡眠時間をしっかりとって、ストレスをためないようにすることですが、防災における公衆衛生は、家族関係をしっかりとつづけておく、コミュニティも人間関係をしっかりと構築しておくことです。地震が起きてから助け合おうとしても無理で、公衆衛生は防災にはとても重要なのです。

それから**長期と短期の関連性を意識する**ということ。阪神で大きな地震が起きた時に、大きな火事になりました。長期の目標は、火事が起きても絶対に燃えないまちをつくる。究極です。津波が来ても

絶対に壊れないまちをつくる。でもこれはすぐにはできるのかというと、そういうことではありません。

阪神・淡路大震災の火災の時も、燃えないまちをつくるためには、木造の住宅再建はやめて、全部コンクリートにしよう。細い道路はダメで、皆の敷地を取って100m道路を通すべきと言った専門家もいました。でもそんなことをやっていたら、合意形成もできず、今のような復興は望めなかったはず。そういう時は、耐震補強をした壊れにくい住宅をつくりながら、たとえ小規模でも水路を確保しながら、とりあえず火災にやや強いまちをつくる。ただ何年かするうちに絶対に燃えないまちにしていこうと、段階を踏んで取り組むべきです。まさにそういう意味では、すぐできる事と時間をかけてやることと両方忘れてはいけません。すぐできることだけやると、本当に大切な事を忘れてしまうので、長期目標をしっかりと置きながら、とりあえずできることをやっていく、これも時間の足し算なのです。

#### ●空間の足し算

国土の強靱化に加えて地域の強靱化を図るということです。簡単に言うと、**幹線道路の防災も路地裏の防災も必要だ**ということです。路地裏の防災については「**モナカ**」の**理論**というものがあります。美味しいモナカは皮が薄いでしょ？あれはアンコが美味しいからで、美味しくないモナカはカワが厚い。

ところでまちはカワとアンコで出来ています。カワは幹線道路や大規模な公園です。行政はカワの部分しか手を出せないのですが、本当はアンコを良くしたい。アンコはそこに住む人が良くしなければならぬのですが、良くなるように行政は後ろから背中を押さねばならない。京都のまちのアンコをいかにして良くしていくか。今でもかなり良いのですが、アンコの悪いところをどうしていくのか、というのが空間の足し算なのです。大きな公共だけでなく小さな公共も良くしていかなければならないということで、2013年6月災害対策基本法が改定されました。それまでは行政が**地域防災計画**を作っていたのが、それに加えてコミュニティが**地区防災計画**を作ってもいいことになりました。地域に即した計画を作るとそれを行政が認めてくれるということです。全国一律のルールではなく、その地域ならではの例外も認めてもらえるようになるわけです。例えば従来の公

的な指定避難所に加えて、地域が独自に避難所として届け出れば、救援物資も届くようになります。ですから地域の皆の思いを反映した計画になるわけで、まさにボトムアップ、下からの防災計画を強化していこうという形になっています。

### ●人間の足し算

阪神・淡路大震災の際、助かった人のうち、自助が7割、共助が2割、公助が1割と言われました。行政も当時は準備が足りなかったのですが、本来は行政と住民は5:5で責任を負うべきです。でも大きな災害では自助も公助も限界があります。その限界をカバーするのが共助や互助になります。コミュニティや近所の助け合いがそれにあたるのですが、海外からの支援も含めると、その可能性は無限大です。東日本大震災では、台湾からの支援が250億円に上りました。実は台湾の国民で250億円を割った額と、日本人が東日本に支援した額を日本国民で割った額では台湾の方が多いのです。まさに共助は無限大で、7:2:1ではなく、5:∞:5の関係だと言えます。この無限大の可能性をどううまくつくっていくかが、結局はコミュニティの問題に尽きるわけです。そういう意味ではまちづくり協議会や元学区というのは非常に大きな役割を果たしていると言えます。

まちの中には色んな人が住んでいます。昔、病院に勤めていた人もいるし、消防団だった人もいるし、カラオケがうまい人もいるし、交通公社に勤めている人もいる。そういうまちの人の特徴をみんなで寄せ合って、まちの力にしていく。

兵庫県のニュータウンの加古川グリーンシティの「ちからこぶ」という取組があります。ここではチャンピオンマップと言って、皆が「私はこれができる」とカードを出します。小学3年生の子は「僕はクラスで一番大きな声が出せる」とか、お母さんは「世界一おいしいカレーライスが作れる」、お父さんは「私はJTBに勤めています」と書きました。子どもさんとお母さんの仕事はすぐ決まるのですが、このお父さんの仕事は決まらなかった。でもちょっと議論しただけで出てきました。1週間から2週間避難所暮らしをしていたら、2週間目には町内会で有馬温泉に行くことにしよう。切符と宿の手配はお父さんにしてもらおう。このお父さんがいるだけでとても便利です。そういう力をどうやってうまく引き出

していくか。地域に住んでいる人の力をみんな寄せ集めるようなことをやりましょう。

### ●手段の足し算

ハードだけでも、ソフトだけでもダメで、**ヒューマンウェアが必要**だということです。東北大震災の時に宮古に万里の長城のような堤防がありました。ところが堤防の裏側に住んでいる人たちが、一番たくさん亡くなっています。大津波警報も比較的早く出たにも関わらず、多数の死者が出たのは逃げなかったからです。堤防がハードウェアで、情報システムがソフトウェアだとしたら、それを使うのは人間なので、人間がしっかり災害に強くなければいけないし、やさしくて正しい動き方ができないといけない。そうするとまさに人間を変えないといけないわけです。むしろもっと人間の気持ちに沿った防災対策をしなければならないというのが、手段の足し算のとても大きなところですよ。

手段の8段階活用というものがあります。日本に人間が住み着いてから自然とどう向き合って、どう防災をやってきたのかを調べました。「諦める、祈る、避ける、逃げる、反らす、和らげる、耐える、抑える」の8段階です。「避ける」は、山際に住んでいると土砂災害など、危険な場所がわかるので、避けるということです。その前は自然現象がわかってないので、「祈る」ということをやります。「家族を大切に、家をいつもきれいに、自然を大切にするので、死んだ後も地獄に落とさないでください」と祈るわけです。祈るというのは、まさに公衆衛生の防災対策なんです。それよりもすごいのが「諦める」。車に乗ることは危険なのに、どうして乗るのでしょう。便利だからです。もちろん命が大切なのは大前提ですが、人間は命だけで生きているわけではありません。美味しいものも食べたいし、楽しいこともしたいですね。

でもあまり防災、防災を叫ぶと、楽しく生きる環境を奪っていくことになりかねない。京都で言うなら、大地震に伴う火災を避けるためにコンクリートで固めた街にするのは、僕は違うと思っています。文化は命と共にとても重要なものです。だから文化を犠牲にして命を守るという考え方はやはりおかしい。命も守るし、文化も守る方法は何かを考えないといけないということです。一番技術が進むと、「耐

える」「抑える」になるわけです。「逃げる」は避難です。「反らす」は今なら免震構造にあたります。昔の例では、武田信玄の霞堤がそれにあたります。次に防風林や防潮林をつくって「和らげる」というように、徐々に進化していきます。そして「耐える」は耐震建築です。どれかだけが有効ということではなく、これらをうまく組み合わせることが重要です。

防災のために街をコンクリートで固めるというのも一つの方法ですが、それが嫌ならば、街の中にたくさん水を流して、緑を増やして、それでもだめなら、早く逃げて命だけは守る。最悪、焼けても仕方がないから、図面を取っておいて、再建する時はより京都らしい町並みを元の場所につくればいいというのが、僕の意見です。要は形ではなく、中に込められた思いや暮らしが重要なので、それを守ることです。手段というのは、一つの事にこだわって在り方を考えてはいけないということです。

## ■減災まちづくりの留意点

### ●安全性を包括的に捉える

防災は隠し味なので、表に出てはだめです。それぞれ地域によって違うので、手作りの味で、見えないうまうやる。隠し味には、色んな人たちがいて、色んな賑わいがあり、色んな暮らしがあります。ジェイン・ジェイコブスの『アメリカ大都市の死と生』には、ボストンの下町がいかに安全で素晴らしいまちかということが書かれています。それは京都の下町と全く同じです。**アメニティがあって、コミュニティがあれば、セキュリティは自然からついてくる。**つまり自然や文化があって、人の繋がりがあるまちを一生懸命つくれば、結果として安全なまちがつかれる。あまり防災、防災と大上段に構えるととんでもないまちができるので、注意してくださいということです。単にコンクリートで覆ったり堤防をつくるのが防災ではないのです。燃えない街をつくるなどということは、何年経ってもできません。できることを確実にやることで、初めて担保されるので、できもしないこと、やりたくないことを防災計画としてあげるべきではないということです。地区防災計画は、行政に認めてもらうだけではなくて、自分たちで決めたからには、自分たちで守らないといけません。まさに市民主導で、自分たち

で決めた事を自分たちでしっかりやっていくことが、地域防災力の向上につながるのです。

## ■歴史都市京都の防災

### ●正しく恐れる

古い伝統のまちとして、良い所も悪い所もあるのですが、その両方をきちんと見なくてはなりません。そういう意味では京都の危険性も甘く見てはいけないと思っています。「**悲観的に想定して、楽観的に準備せよ**」という心構えは防災において、きわめて重要です。悲観的というのは、最悪の最悪の場合を考えます。京都は、木造住宅の耐震化率は約50%で、消火栓に頼っていて、鴨川が流れている程度で大きな自然水利がありません。ですから街中が火の海になったら、水が全く足りません。ではどうするのか。火事が起きないように、徹底的にがんばるのか、燃えても水で消せるようにするのか、最後は燃えてもいいから皆早く逃げて、燃えた後の復興計画を最初からつくっておいて、きれいなまちにつくりかえるしかないわけです。特に細街路（幅員4m未満の道）の総延長が900km、細街路に面する建物が約4万棟建っています。一生懸命に密集市街地対策に取り組まれています、そう簡単にはできません。そうすると幅員2m道路のままでも、安全なまちをどのようにつくるのかという発想に変えていかねばいけません。

### ●正しく備える

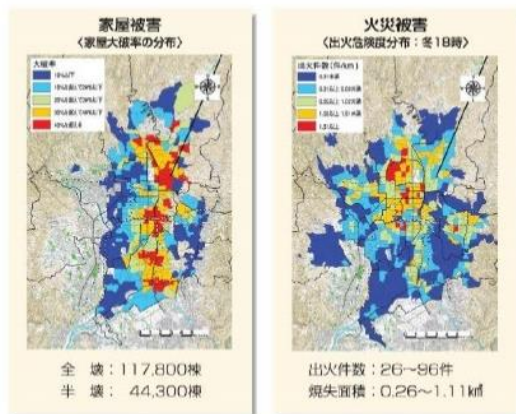
祇園町の事例を見てみましょう。建築基準法では、祇園町は防災上危険だということで、モルタルで塗るか、3階建てにするなら鉄骨構造にしろという規定になっています。でもそれでは祇園町の良さを守ることができません。そこで準防火地域の指定から外すことにしました。建物は燃えにくいように裏側に石膏ボードを入れています。また、祇園町には昔から祇園水道という大口径の水道が来ているので、舞子さんや芸子さんたちで消防隊を組織することで、燃えやすい木造でもよいことになったわけです。細

街路にしても、逃げられればいいわけで、背割り線の裏から逃げられるような避難路を確保するなど、色んな方策は考えられます。消火についても、大きな消防車が消しに来なくても、別の方法で消すことを考えれば、色んな答えがあります。危険性は知りながら、いい加減にしないで、いざという時にどうするか、しっかり考えましょうということです。

### ●花折断層が動いたらどうなる…

これは花折断層が動いた時の被害想定です。右側の地図で赤色の部分は、1km<sup>2</sup>で火事が1~2件起きると想定されている地域です。1km<sup>2</sup>で火事が2件起きると出火点と出火点との距離がだいたい500mで、

花折断層が動いた時の被害想定



風が強いと1時間に200mずつ進みます。両方から200mですから、その中の人たちはぐるっと火に囲まれてしまうことになる。最悪の場合を想定しようというのは、そういうことです。

ではどうするのか。すぐに消すのもいいですし、危険な地域では感震ブレーカーのような電気対策を講じて火事が起きないようにするといった方策もあります。要は「そんな危険な所でも必ず命を守れますよ」という見通しを持たないといけません。対策を足し算して、弱みをどうやってなくしていくのかということです。

### ●伝統的な防災の知恵を活かす

実は、京都のまちには、昔から伝統的な防災の知恵がたくさんあります。昔は御所と本願寺と祇園町に大きな水道が通っていました。本願寺は今でも少し生きていますが、御所にはパイプはあるものの、生きていない。そこで御所水道を復活して、まちなかに水を流すといった工夫もあります（なかなか難しいのですが）。さらに京都には、**相隣関係を重視**

し、**自律的な仕組みで支える**、つまりまちのみんなで約束事をつくって守っているわけです。例えば「風の強い日はさんまを焼かない」。今は大丈夫ですけど、そういう生活のルールがしっかり根付いていて、それをきちんと守ることで、まちの安全性を確保しているわけです。

### 防火の知恵

#### 空間的秩序+生活的規範

- (1) 町家の構成+町並の秩序  
相隣関係の重視  
屋根勾配と全面道路の関係性  
緩衝空間の計画的配置  
火袋、中庭、火除け地  
うだつ、土蔵、虫籠窓
- (2) 生活の慣習+まちの規律  
歳中覚、町式目・町規



京都の家の勾配は揃っていますが、これは経験則で、前の家が燃えると、260度の放物線で火が飛んで来る。その260度の放物線をクリアするように、みんな屋根を決めるので、屋並が揃うわけです。その中でもっと大きくしたいと上に建てる人は、260度にひっかかるので、虫籠窓のように漆喰で固めるわけです。また「うだつを上げる」という言葉がありますが、自分の所で火事が出たら、隣に燃え広がらないように、うだつを上げるわけです。この写真は祇園新橋ですけれども、屋根の勾配が揃っているのは、火事や地震の際、二階から出て屋根の上を走れるように揃えてあるわけです。中庭があって、裏には全部土蔵が並べられていて、土蔵で延焼を防ぐようになっています。ここは漆喰ではなく、2階が高くなっていますが、前の通りが広いと高くできるわけです。京都はそういう緩衝空間も全部計画的に配置して、町並が形成されています。**京都の伝統的な防災の知恵や伝統技法に加えて、「木に竹を接ぐ」のではなく、最新の情報や消火の技術を上手に取り入れる必要がある**わけです。過去、板葺き屋根を瓦屋根に変えたように、どんどん技術開発をして変わってもいいけれども、まちの本質や文化を損なわないように、新しい技術を取り入れていくことが必要なのです。

### ●伝建地区の防災のジレンマ

京都の古い町並みや文化を守ることと、命や暮ら

しを守ることを両方やらないといけないのですが、これがなかなか難しい。特に京都は観光客が多いので、ひとたび地震が起きれば、観光客の命も守らなければならないわけで、防災にとっては観光というのは結構厄介な存在です。そういう中で、伝統的町並みを守るために、古い技術や様式に固執しては、人の命がおろそかになってしまいますし、だからといって防災ばかりを重視すると、とんでもない技術が入ってきたり、コンクリートで固めた街になってしまう。ちなみに、屋根の高さがまちまちなのも防災上は良くありません。屋根の高さが揃っているとゾーンディフェンスで、熱気流が押し寄せてきても、壁に当たって元に戻ります。ところが高さがまちまちだと低い所にビル風のように空気が流れ込んで裏側が燃え広がります。自分の家のことだけを考えて建ててしまうと、町並も壊れる上、防災上も危険な状況に陥ってしまうわけです。ここは本当にジレンマで、あまり**防災防災と行き過ぎず、皆が楽しく過ごせる町並み**をどのようにつくっていくのかということです。

アメリカは単体主義で一軒一軒の安全性を求めますが、木造の文化を受け継いでいる日本では、一軒一軒よりも集団（まち全体）として面としての安全性を求めています。地震が起きても誰も死なない保障をまち全体でつくる方法として考えられるのは、背割りの路地を避難通路にする、隣の家を庭を通して逃げるなど、色んな逃げ方があるし、多様な選択肢があります。それは画一的に法律で決めるのではなく、皆で「こうすれば安全」ということを証明する事が必要なのです。これを「**集団規定の性能基準化**」と呼んでいるのですが、そういうことも将来の課題として考えていくべきだと思います。

#### ●京都の、素晴らしい防災事例です

最後に京都での具体的な防災事例を2件ご紹介したいと思います。橋弁慶山の会所については、ものすごく議論を繰り返しました。結果的に屋根裏にスプリンクラーの配管を通し、手動で開くようになっています。法律上は防災設備として認められないのですが、前の家が燃えても水のカーテンができるというので、認められています。これも法律通りモルタルで塗り固めなくても、新しい技術をどうやってうまく取り入れるかの一つの事例です。

また、京都には**近隣通報システム**というものがあります。祇園の石塀小路の辺りでは玄関に赤いランプがついているのをご存知でしょうか。泥棒や火事

#### 新技術で補完をはかる

- ▶ 伝統技法に加えて、「木に竹を接ぐ」形ではなく、最新の情報や消火の技術を上手に取り入れる
  - ▶ 過去において、防火性能の向上をはかるために「板葺き屋根」を「瓦屋根」に変えたように、現代において、情報技術などの新技術の導入を効果的にはかり、防災面から街並みを進化させていく
- ドレンチャーなどの消火装備  
近隣通報システムなどの情報設備



が起きてボタンを押すと赤いランプが付きます。ランプを見ると近所の人や通りがかりの人が助けに入るというシステムです。糸魚川の大火が、あれほどの大規模火災になったのは、留守の家が多くて、周りが出火を知らなくて大きくなってしまいました。そこでこの近隣通報システムを全国でもっと普及していこうと力を入れることになっています。このシステムが京都には昭和 30 年代から既にあったわけで、まさに隣近所同士で助け合うという発想がなかったらあり得ないと言えます。京都に昔から息づいているこうしたシステムを活かして、安全なまちをつくっていただけるとありがたいと思っています。